

聖書：第一列王記7章13～26節

説教：救いを示すゆりの花

はじめに

ソロモンは父ダビデの跡を継いでイスラエルの王となったとき、神にこう願いました。「善悪を判断して、神の民をさばくために聞き分ける心を与えてください。」この願いは主の御心にかない、神は「あなたに知恵の心と判断する心を与える」と約束されました。そのことがあってからソロモンは神殿建設事業に着手していきます。自分の好みでデザインして建てたわけではない。当然神殿は、主から与えられた知恵によって慎重に設計され、造られていったと考えるべきでしょう。

その神殿は七年をかけて完成します。しかし、神殿で使う什器、備品の類はまだできていません。そこで、ソロモンはツロからヒラムという青銅作りの名人を招いて造らせることにします。それらのものがどのようにして造られていったのか、細々と説明しているのが今日の箇所です。これが私たちとどんな関係があるのかと戸惑うと思います。正直言えば聖書の研究者でも難しいと思われる箇所です。でも、これだけページを割いているのですから、よほど大切なことが書かれているということのはずです。いったいどこが大切だと言うのか。いっしょに考えていきます。

1 青銅職人ヒラムが造ったもの

1) 二本の柱

ダビデやソロモンの時代、イスラエル国内には鉄や青銅を加工できる技術もなければ職人もいませんでした。しかし周りの国はしっかりと持っています。そんななかで戦争

がしばしば繰り返されていきます。敵は鉄や青銅でできた立派な武器で攻めてきます。ところがイスラエルにはかつての日本のように「竹槍」しかない。技術を持っていないという苦勞のなかでダビデは戦いの先頭に立たなければならなかったのです。

ソロモンの時代になっても依然として鉄や青銅を加工する技術が育っていません。そこで隣の国から青銅職人ヒラムを招いて必要なものを造らせることにしました。

そのヒラムが造ったものが今日の箇所では二つあります。まず簡単にその二つを見て参ります。まず一つ目が15節にあります。

「彼は青銅で二本の柱を鑄造した。その一本の柱の高さは十八キュビト。周囲は他の柱と一っしょに、ひもで測って十二キュビトであった。」十八キュビトと言えだいたい八メートルですから、この教会の屋上までの高さです。柱の上にはいくつかの細工が施されています。実際どんなものであったのかは、絵を見た方がわかりやすいでしょう。週報に載せました。わからないところは想像で描かれています。これが神殿の玄関入り口の左右に一本ずつ置かれました。

2) 鑄物の海

ヒラムが造ったものの二つ目は23節にあります。「それから、鑄物の海を造った。縁から縁まで十キュビト。円形で、その高さは五キュビト。その周囲は測りなわで巻いて三十キュビトであった。」

「鑄物の海」と言うとなんだらうかと思いますが、これも絵で見るとわかりやすいので週報に載せてあります。ひとことと言えば水を入れておく桶、ボウルのようなものです。この桶の下には三頭ずつの牛がそれぞれ東西南北を向いて、計十二頭で支えている構造になっています。

2 罪を洗い流すところ

1) ゆりの花

このようものをヒラムは造りました。ではこれらはいったい何のために造ったのでしょうか。ここにはほとんど説明がありません。でも最初にも触れたように、ソロモンは神から知恵をいただいて神殿のいっさいを作ったのですから、必ずなんらかの理由があるはずです。

考える糸口として 22 節に目を留めます。「この柱の頂の上には、ゆりの花の細工があり、このようにして、柱の造作を完成した。」

「柱の造作を完成した」ということばで締めくくる、その文章の中に「ゆりの花の細工」のことばがあることに注意してください。ここだけではない、もう一箇所あります。鑄物の海のことを説明している文章のやはり最後ところ、26 節です。「その海の厚さは一手幅あり、その縁は、杯の縁のようにゆりの花の形をしていた。その容量は二千バテであった。」

二千バテと言うのは、大型タンクローリーで運べば2台分以上の水の量に相当します。プールとまでは言いませんが、それでも大量の水です。その鑄物の海にもゆりの花の細工が見えます。二本の柱と鑄物の海とは「ゆりの花の細工」が施されています。この二つにはなにか共通点があるように思います。

2) 水の洗い 出エジプト記 30 章 18 節「青銅の洗盤」

そもそも鑄物の海に注がれたこの水はいったい何のために使うのか。実はこれははっきり説明があります。出エジプト記 30 章 19, 20a 節にこうある。「アロンとその子らは、そこで手と足を洗う。彼らが会見の天幕に入るときには、水を浴びなければならない。彼らが死なないためである。」

会見の天幕というのは、モーセの時代に造られた移動式の神殿です。祭司たちは、その会見の天幕に入るにあたって水でからだを洗い手足を洗わなければ入ることができません。もしそれをしなければ死んでしまいます。

このような考え方は日本の文化の中にも見ることができます。葬儀に出席した者は、死体のそばに近づいたので身が汚れたと考えます。そのまま家に帰って玄関に入ってしまると、汚れや災いもいっしょに家の中に入れてしまう。そこで塩をからだに振りかけ、手を洗って汚れを落とす。そういう習慣があります。

聖書の世界もこれとよく良く似ています。罪に汚れたまま神殿の中に入ってしまうと死んでしまいます。罪を洗いきよめなければ入ることができない。そこで祭司たちは、「鑄物の海」と呼ばれるところから水を汲んで手足を洗い、からだを洗う。これが鑄物の海の役割です。

そこにゆりの花がありました。罪を洗い流すこととゆりの花が関係しているようです。このゆりの花が二本の柱の上に置かれています。ゆりの花が、なんとなく救いと関係がありそうだとわかってきました。

3 イエス・キリストの救い

1) あす妒に投げ込まれるゆりの花

では、イエスはこのことについて何か語っているのでしょうか。調べると一度だけゆりの花のことに触れていました。ルカの福音書12章27, 28節です。「ゆりの花のことを考えてみなさい。どうして育つか。紡ぎもせず、織りもしないのです。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。しかし、きょうは野にあって、あすは妒に投げ込まれる草をさえ、神はこのように装ってくださるのです。ましてあなたがたには、どんなによくして下さることでしょう。ああ、信仰の薄い人たち。」

比較的有名なみことばですから、何度か聞いたことがあるかもしれません。今まで深く考えてこなかったのですが、今回初めてよく見ると不思議なことがここにあると気がつきました。二つあります。

一つ目は、「あす妒に投げ込まれる」ということばです。

一昨年の三月にイスラエルに行かせていただきました。ちょうど日本の春と同じような季節で、いろとりどりの花が咲いているのを見ることができました。ただしどこでも花が咲いていたわけではありません。水のある場所だけです。エルサレムの町とか、泉が湧いている場所は比較的水は豊かですが、そこから一步外に出るとごつごつした岩と土できた丘と谷ばかりです。緑はすこし見えました。ガイドさんによれば、あと2週間経てば色はなくなり、全部灰色になってしまうということでした。そういう土地なのです。日本

では、たくさんの種類の花をいつでもどこでも見ることができます、聖書を読むときもそんな頭で読んでいます。しかし、実際に行ってみてわかるのですが、所変われば品変わると言うように、イスラエルは違う。咲いている花を見る場所は限られる。花が咲く季節も限られる。野にゆりの花が咲くこと自体が非常に珍しいとっていいくらいです。それなのにイエスはなぜか、野にあるゆりの花があす妒に投げ込まれると言うのです。日本では、家の周りに生えている雑草を抜いて集め、乾燥させて焼く習慣がありますから、なんとなくそういうことかなと読みますが、そもそも雑草そのものが非常に生えづらい場所です。まして短い期間しか咲かないゆりの花を、どうして抜いて妒に投げ込む必要があるのか。これが一つ目の不思議です。

2) ソロモンがいただいた神の知恵

不思議なことの二つ目。イエスは、ゆりの花の話しながらソロモンの名前を出しています。これは、たまたまでしょうか。そうは思われません。イエスが語ることばは私たちの思いをはるかに超えた神のことばです。イエスは、この第一列王記に記されている神殿の玄関に立てられた二本の柱と鋳物の海のことを念頭に置きながら語っているのではないのでしょうか。

ソロモンは神の知恵を用いて、神殿とそのいっさいのものを作っていきました。神の知恵とはなんでしょう。もし、神の知恵がイエス・キリストの救いを示すものでなかったなら、私たちにとってなんの関係があるでしょう。救いがなければやがて人は罪に滅んでいくわけですから何も残らない。もし神の知恵というのならば、罪ある人が滅びから救われ

ていく知恵でなければならないはずです。そうしますと、ソロモンがいただいた知恵は救いの知恵ということになります。イエスがソロモンの名前と一っしょにゆりの花のことを語っているのは、偶然ではない。そこに救いの知恵が示されているからということになります。

3) 救いを示すゆりの花

いったいどういうことでしょうか。さきほど、ゆりの花は罪を洗い流すことと関係していると言いました。これでおわかりでしょうか。「あすは炉に投げ込まれる草をさえ、神はこのように装ってくださるのです。ましてあなたがたには、どんなによくしてくださるでしょう。」

炉に投げ込まれていくゆりの花。何の理由もなく炉に投げ込まれるのではありません。炉に投げ込まれる理由があります。いったいだれが投げ込まれるのですか。イエス・キリストです。なぜ投げ込まれるのですか。私たちの罪を洗いよめるためです。

ソロモンは、ダビデの世継ぎの子としてイスラエルの王にはなりました。けれどもも、本当の世継ぎの子は自分ではない、ということも自覚しています。本当の世継ぎの子は、やがて来られる救い主であると知っている。その方は、罪ある者を救うためにやがて焼かれていきます。その救いがどこにあるのかを示すために、ソロモンは二本の柱神殿の玄関に立て、その柱の上と鋳物の海にゆりの花の形をしたものを置きます。それが自分の役割であることをわきまえていました。

このようにソロモンが建てた神殿には救い主がはっきりと示されていました。私たちは、空しいもの信じているのではありません。

目に見えないけれど、存在するものはやがて形に表れてきます。最初はゆりの花として示され、やがて人となられて来られました。

私たちは目には見えないけれども、確かに永遠の昔からおられる救い主イエス・キリストを信じ続けてまいります。